第二節　巻子本の位置

一

巻子本は巻上・下、二軸の巻子本に仕立てられているためこのように称されている。藤原公任（九六六―一〇四一）筆と伝称されているが、同筆または同書風とされている作品には、本願寺本三十六人家集の清正集・重之集、及び伝藤原公任筆堺色紙・同大色紙・同小色紙があり、実際の書写年代は十二世紀はじめ頃と推定されている。[1] その書は、運筆が速く、「緩急抑揚の変化」[2]があり、「伊房や定信の書に気脈を通じて」[3]いる。巻上には万葉仮名が多用され、宣命書きも用いられており、[4]「漢詩の書写形式に融合させるべき顧慮が払われ」[5]たものと思われる。また、巻下では巻上に比して「字母の複用が著しく減じて」[6]いる。仮名においては巻上と巻下とでは用字法、書き振りが異なるが、「変化を求めて、書の美をあらわすことにつとめた」[7]ことに因るのであろう。

料紙は唐紙・厚様（比較的厚手の紙）・雲紙（飛び雲交用）・染紙・金銀装飾紙など」、「十三種」に「分類することができる」[8]。「いずれも表裏両面に装飾技巧をほどこした、実に華麗なもの」であり、[9] 料紙からも装飾性の高さが窺い知られる。[10]

かつて、堀部正二氏は平安時代の書写とされる『和漢朗詠集』諸伝本を、主に、本文の近似関係より、

(1)御物傳行成筆粘葉装本の系統に近きもの…粘葉本・近衛本・法輪寺切・伊予切

(2)關戸家藏傳行成筆本（源兼行筆）の系統に近きもの…雲紙本・関戸本・巻子本・葦手本

(3)いづれとも判定つかず夫々に特異の本文を有して雑類とも稱すべきもの

に分けられ、[11] 巻子本を「關戸家本等の一類に近いものではあるが、必ずしも善本とは稱し難いやうである」[12]とされた。

一方、久曽神昇氏は、主に形態的な面から、

甲類　雲紙本・関戸本・巻子本・葦手本（雲紙本・関戸本の一類と巻子本・葦手本の一類に分類）

乙類　粘葉本・近衛本・法輪寺切・伊予切

のごとく、二類に分けられた。堀部・久曽神両氏は、(1)・乙類には粘葉本・近衛本・法輪寺切・伊予切を、(2)・甲類には雲紙本・関戸本・巻子本・葦手本を挙げられ、巻子本を(2)・甲類に分類され、(1)・乙類とは別類のものとして位置付けられた。また、久曽神氏は、「少なくとも初稿本・再稿本・精撰本の三種が存するようである。その成立過程は、更に今後研究すべき問題であるが、著者公任の手許に存した原本に、次第に追補せられた結果ではあるまいか」と推測された。そして、「この三類の伝本の成立について考えるに、やはり公任の手になったものであろう」とされ、甲類の雲紙本・関戸本を「初稿本」、巻子本・葦手本を「再稿本」、乙類の粘葉本・伊予切・近衛本・法輪寺切を「精撰本」とされた。[13]

著者は、本書（前節）中、堀部正二氏が「未だ系統を知り得ない」[14]とされた安宅切を取り上げ、その性格について検討を行った。その結果、安宅切は巻子本と近い関係にあることが確認された。本節では、その考察結果を踏まえ、諸伝本間における巻子本の位置、及びその性格について述べる。

二

まず、形態的な面から考察を行う。

詩歌句の有無に関する考察結果について述べる。

調査し得た平安時代の書写とされる諸伝本の詩歌句のうち、いずれかの伝本に存しない詩歌句（そこでは断簡等、切り取られたもの、及びその可能性のあるものについては除外する）を抽出した。そのうち、脱落または追補である可能性が考えられるいずれか一本のみが他本と異なる場合を除く（有る場合も無い場合も独自事象は除く）と次のごとく二六首となる。詩歌番号を挙げ、詩歌句の有無を「有」・「無」として示し、諸伝本の略号を括弧内に挙げる。

①17有（雲・関・粘・伊・久・唐2・山・葦）

無（巻・戊）

②42有（巻・粘・伊・久・下・山・多・戊・葦）

無（雲・関）

③215有（粘・伊・久・山・多・戊）

無（巻・雲・関・葦）

④268有（巻・粘・伊・久・山・戊・葦）

無（雲・関）

⑤313有（雲・粘・伊・久・山・戊・葦）

無（巻・関・和1）

⑥321有（巻・行大・粘・伊・久・唐2・山・多・戊・葦）

無（雲・関）

⑦322有（巻・行大・雲・関・久・和1・山・多・戊・葦）

無（粘・伊）

⑧354有（粘・伊・久・山・戊）

無（巻・雲・関・葦）

⑨380有（巻・粘・伊・久・山・戊・葦）

無（雲・関）

⑩407有（雲・関・粘・法・伊・久・益・山・戊・葦）

無（巻・太）

⑪422の次[15]有（益・山）
無（巻・雲・関・粘・伊・久・下・戊・葦）
⑫434有（巻・雲・関・粘・久・山・戊・葦）
無（伊・太・大内）
⑬434の次有（伊・久・太・大内・山）
無（巻・雲・関・粘・戊・葦）
⑭449有（巻・粘・近・伊・久・太・山・多・戊・葦）
無（雲・関）
⑮534有（巻・粘・近・伊・久・太・下・山）
無（雲・関・戊・葦）
⑯535有（関・粘・近・法・伊・久・太・下・山・戊・葦）
無（巻・雲）
⑰564有（巻・粘・近・伊・久・山・多・戊・葦）
無（雲・関）
⑱603有（粘・近・伊・久・大内・山）
無（巻・雲・関・戊・葦）
⑲617有（雲・関・粘・法・伊・久・唐1・下・山・戊・葦）
無（巻・安）
⑳621有（雲・関・粘・伊・久・山・戊・葦）

無（巻・安）

㉑652の次有（巻・安・定大）

無（雲・関・粘・近・伊・久・益・山・戊・葦）

㉒712有（巻・粘・近・伊・久・安・山・戊・葦）

無（雲・関）

㉓714有（巻・粘・近・伊・久・安・山・戊・葦）

無（雲・関）

㉔729有（巻・粘・近・伊・久・安・太・山・戊・葦）

無（雲・関）

㉕784有（巻・粘・近・伊・久・安・太・益・山・戊・葦）

無（雲・関）

㉖797有（粘・近・伊・久・益・山）

無（巻・雲・関・安・太・戊・葦）

右のうち、粘葉本類とも雲紙本類とも分かち得ない一〇首（①・⑤・⑩・⑪・⑫・⑬・⑯・⑲・⑳・㉑）を除外すると、巻子本は、粘葉本類とは一一首（②・④・⑥・⑨・⑭・⑮・⑰・㉒・㉓・㉔・㉕）、雲紙本類とは四首（③・⑧・⑱・㉖）が一致しており、粘葉本類よりではある。しかし、前者の一一首のうち、⑮を除いた一〇首は雲紙本・関戸本のみに無い詩歌句であり、これはむしろ雲紙本と関戸本との近い関係を示す事例といえる。

次に、無い詩歌句に注目すると、③・⑧では、巻子本・雲紙本類・葦手本に無く、また、⑱では、それらに加え、戊辰切にも無いことが知られる。また、巻子本の、雲紙本との一致（⑯）、及び関戸本との一致（⑤）もあり、巻子本と雲紙本類と

の近い関係が推測される。

また、⑲・⑳は巻子本と安宅切のみに存する事象であり、また、両本は、定信筆大字切とともに、「後人の加筆」[16]とされている一首㉑「いかて猶人にもとらんあやしきはおもはぬなかのえさるましきを」をも共有している。安宅切の現存箇所は、巻下の後半部の一六六首（和歌三二首、漢詩一三四首）であり、『和漢朗詠集』全体からすると二〇％弱にもかかわらず、両本は全てが一致しており（⑲・⑳・㉑・㉒・㉓・㉔・㉕・㉖）、そのうち、巻子本と安宅切においてのみ一致している項目二か所（⑲・⑳）が見られる点も注目される。

なお、①の17は、巻子本には無く、そこに重複歌（630）「見度者柳櫻をこきまぜてみやこそ春の錦成ける」があるが、戊辰切にもその位置に630があり、巻子本は戊辰切とも共通要素を有していることが知られる。

三

次に、排列について検討を行う。

諸伝本間に見られる排列上の異同箇所を詩歌番号で挙げ、諸伝本の略号を括弧内に示すと次の通りである。

①90・91・92（巻・関・粘・伊・久・山・戊）
　90・[91無]・92（雲）
　91・92・90（多）
　[90無]・91・92（葦）
②110・111（巻・雲・関・粘・伊・久・山・戊）
　111・110（唐2・葦）
③137～143・133～136［巻上・春部「躑躅」・「款冬」・「藤」］（巻・雲・関・山・戊・葦）

133～143［巻上・春部［藤］・［躑躅］・［款冬］］（粘・伊）

④188・189（巻・雲・関・粘・伊・久・下・山・戊・葦）

189・188（大内）

⑤195・196（巻・雲・関・粘・久・下・山・多・戊・葦）

196・195（伊）

⑥201・202（巻・粘・伊・久・山・戊・葦）

202・201（雲・関）

⑦226・227（巻・雲・関・粘・伊・山・戊・葦）

227・226（久）

⑧268・269・270・271無（巻）

268無・269・270・271（雲・関）

268・269・270・271（粘・伊・戊・葦）

268・270・271・269（久）

269・270・271・268（山）

⑨273・272（巻・雲・関・久・唐2・山・戊・葦）

272・273（粘・伊・多）

⑩308無・309（巻）

309・308（雲・関・久・山・戊・葦）

308・309（粘・伊）

⑪312・313無（巻・関・和1）
312・313（粘・伊・久・山・戊）
313・312（雲・葦）
⑫368・367（巻・雲・関・伊・久・山・戊・葦）
367・368（粘）
⑬405・406（巻・雲・関・粘・法・伊・久・太・山・戊・葦）
406・405（益）
⑭458・459・460（巻・行大・関・粘・近・伊・久・太・大内・山・戊・葦）
458・459無・460（雲）
⑮465・466（巻・雲・関・粘・近・伊・久・太・戊・葦）
466・465（山）
⑯472・473（巻・関・粘・近・伊・久・太・下・戊・葦）
472無・473（雲）
473・472（山）
⑰484・485・483（巻）
483・484・485（雲・関・粘・近・伊・久・太・益・山・戊・葦）
⑱512・513・511（巻）
511・512・513（雲・関・粘・近・伊・久・山・戊・葦）
⑲545・550・546・547・548・549（巻）

545・546・547無・548・549・550（雲）
545・546・547・548・549無・550（関）
545・546・547・548・549・550（雲切・粘・近・伊・久・山・戊・葦）
⑳557・558・559・560（巻・雲・関・粘・近・伊・山・戊・葦）
560・557・558・559（久）
㉑573・574・575・576（巻・雲・関・粘・近・伊・山・戊・葦）
573・576・574・575（久）
㉒602・603無（巻・雲・関・戊・葦）
602・603（粘・近・伊・久・山）
603・602（大内）
㉓615・616・617無・618・619・620・621無・622（巻・安）
615無・616・617・618無・619・620・621・622（雲）
615・616・617・618・619・620・621・622（関・粘・伊・戊・葦）
615・618・619・620・621・622・616・617（久）
615・616・617・618と619後部の合成・620・621・622・619前部（山）
㉔625・626・627・628・629（巻・関・粘・近・伊・山・戊・葦）
625・626・627・628・629無（雲）
625・628・629・626・627（久）

㉕655・656（巻・雲・関・粘・近・伊・山・戊・葦）
656・655（久）
㉖671・672（巻・雲・関・粘・近・伊・安・山・多・戊・葦）
672・671（久）
㉗686・687（巻・雲・関・粘・近・伊・安・太・多・戊・葦）
687・686（久）
㉘701・702（巻・粘・近・伊・久・安・太・山・戊・葦）
702・701（雲）
701無・702（関）
㉙726・727・728（巻・雲・関・粘・近・伊・安・山・戊・葦）
728・726・727（久）
㉚729・730（巻・粘・近・伊・久・安・太・戊・葦）
729無・730（雲・関）
730・729（山）
㉛741・742・743・744（巻・雲・関・粘・近・伊・久・安・太・戊）
741・742・744・743（山）
741・743・742・744（多）
741無・742無・743無・744無（葦）
㉜746・747（巻・雲・関・粘・近・伊・安・太・山・俊和・戊・葦）

747・746（久）
㉝754・755・756・757無（巻）
754・755・756無・757（雲）
754・755・756・757（関・粘・近・伊・安・太・山・戊・葦）
755・756・754・757（久）

前項「詩歌句の有無」に関する考察で行った方法と同様に他本が同排列であるのに対して、一本のみが他本の排列と異なる場合を除外すると②・③・⑥・⑨・⑩・⑪の六項目となる。その六項目のうち、巻子本は粘葉本類とも同排列である（②・⑥）が、巻上・春部巻末の三詩歌群が雲紙本類と同じく「躑躅」・「款冬」・「藤」の順（③）であり、その他にも雲紙本類と同排列である箇所がある（⑨）。

全用例を通覧すると、排列の揺れている箇所には詩歌句が無い所が二四か所も見られ（①・⑧・⑩・⑪・⑭・⑯・⑲・㉒・㉓・㉔・㉘・㉚・㉛・㉝）、「排列の揺れ」と「詩歌句の有無」には相関性があるように思われる。

本書（第三章）中、著者は、山城切独自の排列の揺れている箇所に雲紙本類に無い詩歌句が目立つことを指摘し、「転写の際、雲紙本類に無い詩歌句が、例えば、異本注記のような形で（欄外などにも）増補されるなどして、その部分がいつしか本文化されて排列に揺れが生ずるごとき形に変移していったとは考えられまいか」[17]と推測した。そして、山城切が形態的な面においては、「雲紙本・関戸本の系譜上に位置する」[18]という結論の一論拠とした。その際、例示した事例のうち、⑧・㉓・㉝にも巻子本に無い詩歌句があり（271・617・621・757）、また、巻子本独自の排列箇所⑲にも、雲紙本類に無い詩歌句がある（547・549）点は注目される。[19]ここから、巻子本も、山城切と同様、雲紙本類との関係があるように思われる。それに加え、巻上・春部巻末の三詩歌群の排列も、「躑躅」・「款冬」・「藤」の順であることから、巻子本は雲紙本類の流れを汲む伝本であると考えてよいのではなかろうか。

詩歌句の有無・排列について考察を行った結果、巻子本は、雲紙本類の系譜上に位置しており、安宅切・葦手本と近い関係にあることが窺われた。また、巻子本と戊辰切との共通要素も看取された。

四

個々の本文について検討を行う。

巻子本は一七二か所もの独自本文を有し、諸伝本中、独自本文数は最多である。特に、漢詩の独自本文には誤脱が甚だしく、そのような本文は実質的な異同箇所と同レベルでは扱いがたい。よって他の伝本に対して一本のみが異なっている場合は全て除外した上で、和歌は一句、漢詩は一文字を単位として異同調査を全本文に亘って行った。その際、異体字・略字等について、また、和歌では漢字と仮名との違い、仮名遣いの違い等について異同とは見做さないこととした。また、後人による改竄かと思しき文字、剥落等のため判読不可能な文字、同筆と認められない文字等については原則、対象外とした。

その結果が次の【諸伝本間の本文異同調査表】である。斜線の左は和歌、右は漢詩を示し、上と右に記した略号の結ばれた欄をそれぞれ三段に分け、上段にはその二本間における対照箇所数を、中段には同文箇所数を、下段にはその対照箇所数に対する同文箇所数の割合を％で表した。

同表によると、巻子本と諸伝本との本文関係の概略については、和歌では、雲紙本・安宅切との同文率が最も高く（六六・七％）、次いで、関戸本（六五・八％）、葦手本（六二・七％）があり、巻子本と近い伝本には安宅切・雲紙本類・葦手本が挙げられる。また、漢詩においても、安宅切と最も高く（八七・一％）、次いで葦手本（六八・六％）、戊辰切（六五・六％）がある。ここから、巻子本は、和歌においては、安宅切・葦手本・雲紙本類と、漢詩においては、安宅切・葦手本・戊辰切との関係が近いことが概略的に知られる。

次に例示するごとく、巻子本と雲紙本類との間には、和歌・漢詩ともに多くの同文箇所がある。巻子本の本文を載せ、異

【諸伝本間の本文異同調査表】

葦手本	戊辰切	山城切	巻子本	唐紙切2	安宅本	久松切	伊予切	法輪寺切	近衛本	粘葉本	関戸本	雲紙本	歌／詩
158	158	159	159	24	21	157	160	20	57	160	160		雲紙本
89	83	100	106	14	6	92	75	11	23	72	147		
56.3	52.5	62.9	66.7	58.3	28.6	58.6	46.9	55.0	40.4	45.0	91.9		%
158	158	158	158	24	21	157	160	20	57	160		294	関戸本
89	80	104	104	13	5	88	72	13	22	69		269	
56.3	50.6	65.8	65.8	54.2	23.8	56.1	45.0	65.0	38.6	43.1		91.5	%
160	158	158	158	25	21	157	160	21	58		312	294	粘葉本
77	83	59	82	13	13	107	152	21	52		115	126	
48.1	52.5	37.3	51.9	52.0	61.9	68.2	95.0	100.0	89.7		36.9	42.9	%
57	57	57	58		17	55	58	19		171	168	157	近衛本
31	31	19	26		9	40	49	18		159	68	80	
54.4	54.4	33.3	44.8		52.9	72.7	84.5	94.7		93.0	40.5	51.0	%
20	20	19	20		9	20	20		53	60	60	60	法輪寺切
16	13	9	12		7	17	19		49	58	28	31	
80.0	65.0	47.4	60.0		77.8	85.0	95.0		92.5	96.7	46.7	45.0	%
159	158	159	159	25	21	157		60	170	315	312	293	伊予切
81	83	62	89	15	15	110		60	160	301	118	132	
50.9	52.5	39.0	56.0	60.0	71.4	70.1		100.0	94.1	95.6	37.8	45.1	%
155	155	155	155	23	21		311	60	172	312	309	291	久松切
98	92	82	97	18	13		210	44	125	217	141	149	
63.2	59.4	52.9	62.6	78.3	61.9		67.5	73.3	72.7	69.6	45.6	51.2	%
21	21	20	21			71	71	18	66	71	70	67	安宅本
16	12	4	14			39	36	7	35	34	27	25	
76.2	57.1	20.0	66.7			54.9	50.7	38.9	53.0	47.9	38.6	37.3	%
24	24	24	23			23	26			26	24	23	唐紙切2
21	13	11	15			15	12			10	14	12	
87.5	54.2	45.8	65.2			65.2	46.2			38.5	58.3	52.2	%
158	156	157		26	70	303	305	58	167	308	298	287	巻子本
99	97	88		15	61	184	170	30	89	165	125	129	
62.7	62.2	56.1		57.7	87.1	60.7	55.7	51.7	53.3	53.6	41.9	44.9	%
157	157		297	26	67	304	307	60	167	307	306	287	山城切
80	77		177	19	35	213	188	40	100	184	167	164	
51.0	49.0		59.6	73.1	52.2	70.1	61.2	66.7	59.9	59.9	54.6	57.1	%
156		302	299	24	71	308	311	60	171	312	308	292	戊辰切
109		201	196	16	40	216	212	36	116	209	142	152	
69.9		66.6	65.6	66.7	56.3	70.1	68.2	60.0	67.8	67.0	46.1	52.1	%
	301	291	293	25	64	296	305	58	161	306	300	282	葦手本
	231	183	201	25	38	199	183	37	106	179	144	153	
	76.7	62.9	68.6	100.0	59.4	67.2	60.0	63.8	65.8	58.5	48.0	54.3	%

同箇所に傍線を付し、以下、諸伝本間における異同を示し、括弧内にはその本文を有する伝本の略号を挙げる。

①62櫻花春加礼る(1)今年谷人乃情尼(2)被足也波勢ぬ（巻）

(1)〈同〉ことしたに（雲・関）

〈異〉としたにも（粘・伊・久・戊・葦）

(2)〈同〉あかれやはせぬ（雲・関・久）

〈異〉あかれやはする（粘・伊・戊・葦）

②437簟瓢屡空草滋顔渕之巷藜藿深鎖雨濕原憲之樞（巻）

〈同〉簟瓢（雲・関・葦）

〈異〉瓢簟（粘・伊・久・太・大内・山・戊）

しかし、その一方、巻子本は、次のごとく、粘葉本類の本文をも有している。

◆8春立止云許尓也御吉野丶山母霞天今日波見由良牟（巻）

〈同〉けふはみゆらむ（粘・伊）

〈異〉けさはみゆらむ（雲・関・久・山・戊）

また、中には、

◆765(1)しはしたに(2)へかたくみゆるよの中にうらやましくもすめる月かな（巻）

(1)〈同〉しはしたに（雲・関・久・太・山）

〈異〉かくはかり（粘・近・法・伊・安・戊・葦）

(2)〈同〉へかたくみゆる（粘・近・法・伊・久・安・戊・葦）

〈異〉へかたかりける（雲・関・山・太）

のごとく、巻子本には、粘葉本・雲紙本両類の本文が一首中に混在している例もある。

十一世紀中葉の書写とされる粘葉本・雲紙本両類の本文が混在している事象は、本書中述べる通り、[20] 巻子本同様、十二世紀書写とされる、久松切・山城切・戊辰切・葦手本にも共通して見られる（ただし、本文内容においては、巻子本・山城切・葦手本は雲紙本類よりであり、久松切・戊辰切はどちらかといえば粘葉本類よりであって、粘葉本・雲紙本両類の本文混在の様相が錯綜してはいるのだが）。

また、巻子本と十二世紀書写本群との間には横の繋がりが認められる。

次に、巻子本と、葦手本・戊辰切・久松切との間に見られるいわゆる共通異文例をそれぞれ挙げる。

①388氷消漢臣|應疑覇雪盡梁王不召枚（巻）

〈同〉臣（葦）

〈異〉主（雲・関・粘・伊・久・大内・下・戊）

②389胡寒|誰能全使節呼沱還恐失臣忠（巻）

〈同〉寒（葦）

〈異〉塞（行大・雲・関・粘・伊・久・大内・下・戊）

③319四五朶山粧雨色両三行雁點雲聲|（巻）

〈同〉聲（戊）

〈異〉秋（行大・雲・関・粘・伊・久・唐2・下・散・山・葦）

④371聲々已断華亭鶴歩々初知|葛履濡（巻）

〈同〉知（戊）

〈異〉驚（雲・関・粘・伊・久・山・葦）

⑤59今年閏在三月剰看|金陵一月花（巻）

〈同〉看（久）

〈異〉見（雲・関・粘・伊・山・戊・葦）

⑥774佳|辰令月歓無極万歳千秋楽未央（巻）

〈同〉佳（久）

〈異〉嘉（雲・関・粘・伊・久・山・戊・葦）

なお、巻子本と、安宅切・葦手本・戊辰切には、独特な漢字のくずし方の類似も見られ、[21] 本文のみならず書写上の共通性も注目される。

また、巻子本と山城切との間にも、たとえば、240「重々」（諸本、「澄々」）、374「庚亮」（諸本、「庚公」）、415「遊糸見由」（諸本、「あそふいとゆふ」）などの同文箇所があり、両本は十二世紀書写本特有の本文を共有しているといえる。

次に、巻子本の独自本文について述べる。巻子本の独自本文には、次の事例のごとく他文献と一致している本文もあるが、その多くは、誤字、脱字、衍字、転倒などの結果生じた杜撰な本文であるといえる。

◆267不是花中偏愛菊此花開盡|更無花（巻）

〈異〉後（雲・関・粘・伊・久・山・戊・葦）

『全唐詩』巻十五、元夢十六「菊花」。当該箇所、「盡」。

巻子本の独自本文には、偏旁冠脚を省略したと見られるもの［246「雨」（諸本、「霜」）など］、また、字形の類似により生じたと思われる誤写［394「堂」（掌）（諸本、「掌」）、408「乱」（龍）（諸本、「龍」）など］、衍字［475「只陵雲」（諸本、当該文字ナシ）など］が多数存する。また、和歌では、538の二句目が巻子本には「あれたるやとの」（けふりたえにし）とあるが、「けふりたえにし」とあるべきところを「あれたるやとの」と書したのは、初句「きみなくて」につられたことによる誤写と推察される。以上のようなミステイ

クは、巻子本の書写者の運筆が早いことにも関係しているように思われる。

その他、巻子本には、410「緑紅」（諸本、「緑竹」）、422「樹性」（諸本、「松性」）、588「将来」（諸本、「當来」）、670「悟桐」（諸本、「梧岫」）、743「往年」（諸本、「往事」）などの傍線部（著者が付した）のごとく、前後に位置する語意の連想により別の語に転化したように取れる独自本文もある。

また、誤写を削消し、その上から訂正を加える、または傍書するなどの跡も確認され、華麗な料紙に能書家により書された作品に多数の補訂が加えられるというのは不審ではあるが、いずれにせよ巻子本の書写者の本文内容の理解が不十分であったということは確かである。

以上、本文について考察した結果、巻子本は雲紙本類よりに位置してはいるものの、粘葉本類の本文をも有していた。また、巻子本と十二世紀書写本群との連関性も認められたが、とりわけ、安宅切・葦手本・戊辰切との関係が近いことが明らかとなった。それに加え、巻子本と安宅切・葦手本・戊辰切との間には、本文のみならず、書写上の共通性も認められた。

五

巻子本は雲紙本類の系譜上に位置すると考えられるが、一方では粘葉本類の要素をも有していた。このように粘葉本・雲紙本両類の要素を有する点については既に述べたように、十二世紀書写本群に共通してみられるものである。巻子本と十二世紀書写本群には横の繋がりも確認されたが、とりわけ巻子本は、安宅切・葦手本と近い関係にあり、また、戊辰切とも連関性を有しているという事実が明らかとなった。

書風においてもこの四本には共通性がある。すなわち、巻子本の書は「伊房や定信の書に気脈を通じて」[22]おり、安宅切の書についても「伊房の筆跡に似た定信がこの〈安宅切〉の筆者ではなかったか」[23]などとされている。また、葦手本の書写者は奥書により、藤原伊行であることが知られており、戊辰切も藤原定信・伊行親子の手になるという説もある。[24]藤原伊房は藤

原行成を祖とする世尊寺家の第三代目に当たり、藤原定信は世尊寺家第五代目、藤原伊行は世尊寺家第六代目に当たる。

形態・本文面に焦点を当てた本考察結果においても、巻子本は世尊寺家、あるいはその周辺の人々の手になる伝本と関係があると考えられる。

注

(1) 小松茂美氏編『日本書道辞典』[昭和62年　二玄社] 97頁

(2) 春名好重氏編著『古筆大辞典』[昭和54年　淡交社] 1242頁

(3) 小松茂美氏著『古筆学大成』第一四巻[平成2年　講談社] 350頁

(4) 山田俊雄氏「和歌の真名書きについての試論―朗詠和歌を中心にして―」『山梨大学学芸学部研究報告』第五号[昭和29年]

(5) 前掲(注3)に同。350頁

(6) 春名好重氏「傳公任筆御物朗詠集の用字法」『書道』第一二巻 第五号[昭和18年5月]

(7) 前掲(注3)に同。350頁

(8) 前掲(注3)に同。347頁

(9) 前掲(注3)に同。347頁

(10) 巻子本には詩歌句の下に小書きで注されている注記が省略されている。そこからも美術品的性格が窺われる。

(11) 堀部正二氏編著『校異和漢朗詠集』[昭和56年　大学堂書店] 312頁

(12) 前掲(注11)に同。22頁

(13) 久曽神昇氏著『仮名古筆の内容的研究』[昭和55年　ひたく書房] 197頁

(14) 前掲(注11)に同。37頁

(15) 記述中、「の次」とは『新編国歌大観』に無く、無番号。当該番号の詩歌句の次（ここでは422の次）に位置することを意味する。本表記により当該詩歌句の位置を示す。以下、同。

(16) 山田孝雄氏校訂『岩波文庫676倭漢朗詠集』［昭和14年 岩波書店］13～15頁

(17) 拙稿「久松切の位置」（本書〈第三章 第九節〉）

(18) 拙稿「山城切の位置」（本書〈第三章 第八節〉）・前掲（注17）に同。

(19) 野沢千佳子氏は、粘葉本と関戸本の詩歌句数の相違に着目され、「一つの漢詩の詩句の一部が関戸本に無いという例や同じ場所で同時に詠まれた詩句を粘葉本の方が多く載せて」いる点を指摘された。その事例には、本節「三」に挙げた用例⑲のうちの549、㉘の701、㉚の729なども挙げられ、関戸本に、549・701・729が無いのは「誤脱などが原因ではなく」、「意図的改変」に因ると述べられた（「『和漢朗詠集』の和歌本文について―粘葉本・関戸本の本文異同が示すもの―」〈『王朝の文学とその系譜』［平成3年 和泉書院］所収〉）。⑲には巻子本に、㉘には雲紙本に、㉚には山城切に独自の排列の揺れが看取されるのだが、その御論を踏まえると、無い詩歌句が後人により追補された結果、排列に揺れが生じた可能性も考えられ、「詩歌句の有無」と「排列の揺れ」には相関性があるように思われる。

(20) 拙稿「葦手本の位置」（本書〈第三章 第三節〉）・前掲（注18）他。

(21) たとえば、688「囀」など。なお、和歌の真名書きの一致もみられるが、その点は拙稿「葦手本の位置」（本書〈第三章 第三節〉）において指摘。

(22) 前掲（注3）に同。351頁

(23) 小松茂美氏著『日本名跡叢刊』83［昭和59年 講談社］79頁

(24) 小松茂美氏著『古筆学大成』第一五巻［平成2年 講談社］345頁